



特別支援学校教師はどのようにASDのある子どもと協働を可能にする社会的相互作用を成立させているのか――教師の実践知に対する現象学的探究

呉, 文慧

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2023-09-25

(Date of Publication)

2026-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8705号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485889>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



(別紙様式4)

論文内容の要旨

氏 名 呉 文慧
専 攻 人間環境学研究科人間発達専攻
指導教員氏名 赤木和重

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

特別支援学校教師はどのようにASDのある子どもと協働を可能にする社会的相互作用を
成立させているのか——教師の実践知に対する現象学的探究

論文要旨

本研究では特別支援学校の教師が、教育という文脈においてどのように自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) のある子どもに対して関わっているのかを探究した。

教育においては教師と子ども、両者が主体となって新たな知を生み出し、互いに変容しつつより善い方向を志向する「協働」を可能にする社会的相互作用が重要であることが指摘されている。しかし、ASDのある子どもには社会的相互作用の持続的欠陥があるためこうした協働が困難であり、教師はどのようにASDのある子どもと関わればよいか悩んでいることが報告されている。

こうした中、本研究では一般的には意思疎通が困難と思われる他者とコミュニケーションを成立させる実践者の実践知の研究が蓄積されている現象学的アプローチに注目し、特別支援学校の教師たちが日常的に発揮している実践知を明るみに出すことを目指した。

本論文は6章から構成される。1章ではASDのある子どもに対する実践に関する先行研究において多く研究の蓄積がなされている、ASDのある子どもに対するエビデンスに基づいた実践 (Evidence Based Practice: EBP) を概観し、さらにその批判を整理した。結果として、まずEBPが、ASDのある子どもはTDの子どもに比べ特定の能力の欠陥があるためにそれを補償する必要があると考える「欠陥—補償モデル」の傾向があることが明らかとなった。そして、それを乗り越えるためのモデルとして、ASDのある子どもを、TDの子どもと比べて何かが欠陥しているのではなく、TDの子どもと差異がある存在であると表象し、教師がその差異を理解し尊重しようとする「差異—尊重モデル」、あるいはASDのある子どもとTDの子どもの社会的相互作用を成立させる能力の共通性を強調して表象し、大人と子どもの対話に基づく協働を重視する通常教育との接合を重視する「共通性—協働モデル」、さらにASDのある子どもをTDの子どもと差異がある存在であると表象しつつ、その差異を孕みながらも教師と協働して新たな知や主体を生成する「差異—協働モデル」の四つの類型が得られた。そして本研究では他のモデルの限界を乗り越える可能性を有しつつ、未だ議論が十分に蓄積されていない「差異—協働モデル」に着目し、研究を進めた。本研究の関心に照らした「差異—協働モデル」の課題として、それをどのようにすればより程度の重いASDのある子どもに対しても実現できるか、そしてASDのある子ど

もと協働する中で教師がどのように変容するのかが検討されていないというものがあげられた。そのため本研究では「差異—協働モデル」がどのようにすればASDある子どもにも適用することができるのか、そしてより程度の重いASDのある子ども（や非人間）と特別支援学校の教師がどのように協働し、互いに変容していくのかを、実践知の観点から探求することを目的とした。

2章ではASDのある子どもに対する教育に関する現象学的研究の類型化を行った。そこではASDのある子どもの経験構造を描き、教師はそこから導き出された関わり方を採用するという「ASDのある子どもの現象学」、ASDのある子どもと彼／女らに関わる大人の関係に焦点を当てて彼／女らへの支援を導き出す「ASDのある子どもとの関係の現象学」、そしてASDのある子どもに関わる教師の経験構造を探求する「ASDのある子どもに関わる実践者の現象学」があることを示した。そして本研究においては現象学的アプローチの中でも、実践者の経験構造やあらゆる行為や知の「地盤」、そして「源泉」として機能する〈身体〉のみならず、そうした経験や〈身体〉に基づいた実践を可能にする、実践者が住み込む世界を構造化している「気遣い（Sorge）」を解釈することを通じて実践知を明るみ出すことを目指す解釈学的現象学を研究方法論として採用する理由を論じた。また、研究フィールドとしては、教師と子どもの話し合いを重要視し、差異が強調されると考えられる知的障害の伴うより程度の重いASDのある子どもが在籍するA特別支援学校をフィールドに研究を実施することを述べた。

3章では教師がどのようにASDのある子どもと関係を深め、協働を可能にする社会的相互作用を成立させているのかを探究した。結果として、ASDのある子どもの世界を安定させるために、教師が類似的他者へと自分自身を変容させ、その上でオリジナリティーを加えたアレンジを加えることで、相互作用を起こしながらそれぞれが新たな主体へと生成変化し、新たな知を生み出していたことが明らかになった。さらにその際、歌（音楽）という非人間もASDのある子どもの世界を感覚・規範的な枠組みを提示することで彼／女らの世界を安定させ、新しい世界を踏み出すための一步を支える枠組みとして機能していた。

4章では教師がどのようにASDのある子どもと協働して授業作りを行なっているのかを探究した。結果として、ドーナツを作るという実践をする中で、教師自身、ASDのある子ども、そしてドーナツ生地といった異種混淆のアクターが互いに相互作用を行う中で授業を組み立てていることが明らかになった。そしてその際に教師は即興的に教育目標や作成するドーナツを変化させていた。ここで重要な役割を果たしていたのが異種混淆のアクターがそれぞれ満たされる《枠》を教師が柔軟に変容させることであった。さらにこうした《枠》があるためにASDのある子どもに見通しが立ち、新しい自分になるための一步を踏み出す支えとなっていた。

5章では非人間である教具が、教師とASDのある子どもとの協働に対してどのような影響を与えているのかを探究した。結果として、以下のことが明らかになった。図工の授業において、当初教師はASDのある子どもがパニックにならないように子どものこだわりを尊重するという「無難な」関わりをしていた。しかし水差しという教具がASDのある子どものこだわりを解きほぐし、自らの想像を超える姿を見た教師は、様々な教具を用意して子どもが新しい実践へと参加できるように試すようになった。こうした変容の結果、教師がASDのある子どもと教具をコントロールしようとするのではなく、先に何が起こるか完全には把握できないまま授業に自らを投げ出す、即興的な実践を行う中で三者の協働が可能になっていたことが明らかになった。つまり、ここでもこうした即興的な実践に自らを投げ出すこと、つまり教育目標を柔軟に変容させることが重要であった。さらに注目すべきは、教師の教具観が自らの想像する授業を実現す

る客体から、共に授業を作る主体へと変容しており、授業が教師と教具のハイブリッドな主体によって行われていたことであった。

6章では上記の三つの事例から、「差異－協働モデル」をより程度の重いASDのある子どもに対して実現するには、教師がASDのある子どもの世界を尊重すること、そして教師とASDのある子どもの間に共通性を創造することが重要であることが示唆されたと述べた。さらに教師や子ども、そして教師がASDのある子どもと協働を成立させる際に重要な役割を果たしたのが、教師自身、ASDのある子ども、そして教具といった非人間という異種混交のアクターの意図や特性を活かすために当初の教育目標を柔軟に変容させる即興的实践を行うことができる教師の柔軟なく身体>であったことが明らかになった。

本研究の新規性は以下の三つにまとめられる。まず、教師たちは知的障害を伴うより程度の重いASDのある子どもに対して、意表をつく、あるいは《枠》を設定するなど対話あるいは交渉によらない仕方でも協働を実現しようとしていたことを明らかにしたことである。次に、協働に際してはASDのある子どもを理性的・間主観的に理解することも重要であるが、同時に彼／女らを理解し尽くすことができないということを認め、自らが実践をコントロールできないことを楽しむことが重要である点を明らかにしたことである。最後に、ASDのある子どもの変容において、教師のみならず、教具という非人間が大きな役割を果たしていることを明らかにした点である。

本研究の限界として、モデルを静的なものとして捉えたことで教師が複数のモデルを移行、または同時に実践する姿を記述できなかったこと、そして分析を通じて得られた解釈が絶対的なものにはなり得ないことがあげられた。

論文審査の結果の要旨

氏 名	呉 文慧		
論文題目	特別支援学校教師はどのようにASDのある子どもと協働を可能にする社会的相互作用を成立させているのか——教師の実践知に対する現象学的探究		
判 定	合 格・不 合 格		
審 査 委 員	区 分	職 名	氏 名
	主 査	教授	赤木和重
	副 査	教授	吉田圭吾
	副 査	教授	津田英二
	副 査	准教授	稲原美苗
	副 査	准教授	川地亜弥子
要 旨			
本論文は、社会的相互作用の困難を有する自閉症スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder: ASD）のある子どもに対して、特別支援学校の教師たちがどのように協働を可能にしているのかについて明らかにすることを目的としている。 本論文は、6章から構成された。1章ではASDのある子どもに対する実践に関する先行研究を整理した。子どもに対するエビデンスに基づいた実践（Evidence Based Practice: EBP）を批判的に概観し、議論が十分に蓄積されていない「差異—協働モデル」の意義に注目した。2章では「差異—協働モデル」を実証的に検討するうえで、解釈学的現象学からのアプローチから迫る必然性について論じた。教師の実践知を検討するうえでは、実践者の経験構造や<身体>のみならず、その経験構造や<身体>に基づいた実践を可能にする「気遣い（Sorge）」に着目することが必要であることを論じた。3章では教師がどのようにASDのある子どもと関係を深め、協働を可能にしているのかについて検討した。教師にインタビューを行った結果、ASDのある子どもの世界を安定させるために、教師が類似的他者へと自分自身を変容させ、その上でオリジナリティーを加えたアレンジを加えることで、相互作用を起こしながらそれぞれが新たな主体へと生成変化し、新たな知を生み出していたことが明らかになった。4章では教師がどのようにASDのある子どもと協働して授業づくりを行なっているのかを検討した。授業場面の動画を用いつつ教師にインタビューを行った。その結果、ドーナツづくりの実践をするなかで、教師、ASDのある子ども、そしてドーナツ生地といった異種混淆のアクタ			

ーが互いに満たされる《枠》の中で授業が行われていたことが明らかになった。5章では非人間である教具が、教師とASDのある子どもとの協働に対してどのような影響を与えているのかについて検討した。教師に継続的にインタビューを行った。その結果、水差しという教具のエージェンシーがASDのある子どものこだわりを解きほぐし、教師の志向性を変容させ、先に何が起こるか完全には把握できないまま授業に自らを投げ出す、即興的な実践を行う中で三者の協働が可能になっていたことが明らかになった。6章では、以上の研究をもとに総合考察を行った。「差異－協働モデル」をより程度の重いASDのある子どもに対して実現する際には、教師がASDのある子どもの世界を尊重し、かつ、教師とASDのある子どもの間に共通性を創造することが重要であることが示唆されたと述べた。さらに教師や子ども、そして教師がASDのある子どもと協働を成立させる際に重要な役割を果たしたのが、教師自身、ASDのある子ども、そして教具といった非人間という異種混交のアクターの意図や特性を活かすために当初の教育目標を柔軟に変容させる即興的实践を行うことができる教師の柔軟なく身体>であったことを論じた。

本論文は以下の点で評価されうる。1つは、研究視点の独創性である。これまでの先行研究は、教師とASDのある子どもが「協働できない」という否定的な側面に注目していた。それに対し、本研究では、教師とASDのある子どもが「協働できうる」点に注目し、そこで、どのように教師がかかわっていたのかという実践知を検討している。この独創的な視点を有するがゆえに、これまで明らかにされてこなかった「教師、ASDのある子ども、教具」の動的関係についての新たな知見を提起することに成功している。

2つは、先行研究を適切に概観している点である。ASDのある子どもを対象とした数多くの社会的相互作用研究について偏りなく概観していることはもちろん、そこから「差異－協働モデル」というモデル構築を行っている。この緻密な作業により、当該領域における本論文の位置づけを明確にできている。

3つは、解釈学的現象学を採用することにより、実証的かつ論理的に結論を導き出せた点にある。本論文では教師がどのようにASDのある子どもと協働できたかをインタビューから検討している。その際、実践者の経験構造やその背景をなす「気遣い」といった概念を採用することで、解釈の妥当性を高め、より実証性・論理的に本論を展開することができている。

本審査委員会では、以上より、本論文は、教師がASDのある子どもと協働を可能にする実践知を明らかにし、かつ、ASDのある子どもを対象とした心理・教育系領域について、重要な貢献をなすものであることを認める。よって学位申請者の呉 文慧は博士（学術）の学位を得る資格があると判断する。

なお、学位申請者は下記の通り、本論文を構成する一部として査読付学術論文2篇を発表しており、博士学位申請の基本的条件を満たしている。

- (1) 呉 文慧（2023）ASDのある子どもに対する教師の実践の類型化——社会的相互作用に着目して 神戸大学発達・臨床心理学研究, 22, 48-56.
- (2) 呉 文慧（2023）教師はどのようにASDのある生徒と社会的相互作用を成立させるのか——授業の「不調」場面に焦点を当てた現象学的探究 質的心理学研究, 22, 7-24.